遺構写真撮影記

田中　彰

昭和60年度から写真関係の仕事をしている。普段は、センターの写場で遺物を撮影していることが多いが、時々、現場へも撮影に行く。以下は、最近の現場での遺構写真撮影の記録である。撮影はすべてフィールドタイプの大型カメラを使用しており、フィルムは4×5サイズを用いている。

(1)篠・マル山1号窯跡(亀岡市)　9世紀前半の須恵器焼成窯である。焼成部中央付近では天井部が残存していたが、崩落する危険性があったため、窯体内の土を半分残したままの状態をまず撮影した。その後、すべての土を除去し、トンネル状になったところを撮影したのが(1)の写真である。「天井落ちるな」と念じつつ、土の除去作業を待つ時間は、非常に長く感じられた。

＜ところで、土を半分残した方の写真は、たぶん使われないんだろうな‥‥。＞

(1)　篠・マル山1号窯跡('96.6)

(2)　五領池東瓦窯跡2号窯('96.9)

(3)　田辺城跡虎口('96.8)

(4)　東土川遺跡木棺墓('97.2)

(2)五領池東瓦窯跡(木津町)　奈良の法華寺阿弥陀浄土院の瓦を焼いた窯で、3基のロストル式平窯を撮影した。撮影当日は天候に恵まれ、全景写真、各窯跡の「縦」・「横」写真、低い位置からの写真と順調に撮影することができた。

＜こういうことは非常に稀で滅多にないことだなあ‥‥。＞

(3)田辺城跡(京田辺市)　中世山城の「虎口」の部分を撮影した。一日中、カンカン照りの暑い日で、小さい雲が時々来て、瞬間、うす曇りになる天気であった。モノクロは、その瞬間を待って何枚か撮影したが、カラーリバーサルでは、色温度の関係で青く発色する(瞬時にカラーメーターで色温度を測定し、フィルターで補正するのは神わざに近い)のでカンカン照りの状態で撮影した。

＜昔はよく足場の上でねばったものだが、今はそんな時間的余裕はないなあ‥‥。＞

(4)東土川遺跡(京都市)　「戦士の墓」と言われている方形周溝墓の溝中埋葬主体部を撮影した。ここで大失敗をした。私市円山古墳の撮影足場の上から大型カメラを三脚ごと落下させて以来の大失敗であった(小さな失敗は数えきれないほどしている)。大型カメラの蛇腹が傷んで穴があいていたのだ。フィルムは全滅だった。ポラロイドも撮っていて画面周辺部が正常に写っていなかったのも確認していたが、寒さが原因であると誤った判断をしてしまったのだ。さいわい、次の日に撮り直すことができ、最悪の事態は避けることができた。

＜現場の皆様、たいへん御迷惑をおかけしました。深く反省しています。＞

(5)浦入遺跡(舞鶴市)　縄文時代前期の丸木舟の出土状況を撮影した。丹後の冬は雪・雨

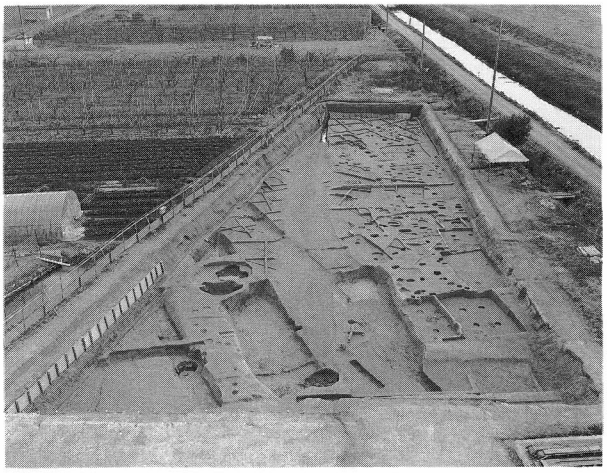
の日が多い。この時も雨の中での撮影となってしまった。カラーの発色が心配であったが、まずまずの結果であった(この時は、ちゃんとフィルターで補正した)。丸木舟は一応清掃したが、周辺の土はベトベトのままで、足跡も見えるのが悲しい。

＜丹後の冬の現場は、写真撮影が大変だなあ‥‥。＞

(5)　浦入遺跡丸木舟('98.1)

(6)内里八丁遺跡(八幡市)

クレーンを使用したかなりの高度からの全景写真撮影となった。クレーンは、わずかな風でもはっきりと動いていることが認識できるくらい安定が悪い。こういう場合は、「ブレ」を防ぐため、不必要に絞りを絞り込まず、可能な限り速いシャッタースピードで撮影しなければならない(この場合、小型カメラで35㎜の広角レンズでは、絞りｆ5.6ぐらいですべて被写界深度内にはいる)。



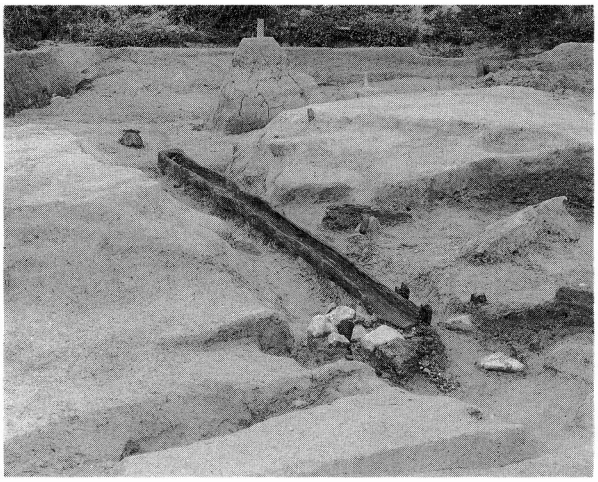
(6)　内里八丁遺跡Ｅ地区第４遺構面('98.2)

＜クレーンはこわい。足場３段でも高くてこわいのに‥‥。＞

(7)興戸宮ノ前遺跡(京田辺市)　中世の導水施設(木樋)を撮影した。木樋のすぐ周辺は、すぐに水が湧いてくるような状況であり、スポンジで水を吸い取りながらの撮影となった。普通このような被写体では、濡れた木製品の部分は黒くつぶれ、乾いた周辺の土が白くとんだ写真になりがちである。しかし、この時は、前日の雨の影響で土も適度に湿っていたため、ほどよいコントラストの写真となった。

＜コントラストはいいが、木樋の清掃が充分でないなあ‥‥。＞

(8)下植野南遺跡(大山崎町)　方形周溝墓群を撮影した。当日は、ヘリコプターによる空撮も同時に行われたため、数多くは撮影できなかった。ここでは、本物のヘリコプターに



(7)　興戸宮ノ前遺跡木樋('98.10)

(8)　下植野南遺跡方形周溝墓群('98.11)

よる撮影であったが、最近、ラジコンヘリによる空撮が増加している。ラジコンヘリの場合、どうしても振動による「ブレ」た写真が多い。また、露出もリバーサルではきびしい場合が多い。手軽に撮影できるメリットはあるが、写真の質から見ると、劣ると言わざるを得ない。

＜空撮が増加してから、各調査担当者が全景写真を撮影することが少なくなったなあ‥‥。＞

現場の写真は、遺物の写真とは違い、調査が終了してしまうと二度と撮り直せないものである。そのため、可能な限りよい条件で撮影すべきものであるということは言うまでもない。しかし、自分の過去の例を見てみると、条件のよくない時に撮影していることが結構多い。季節的には、真夏の暑い時期と真冬の寒い時期の撮影が多く、カンカン照りの日中でも雨でも撮影しなければならない時もある。足場の移動に時間がかかったり、清掃の不十分な時もある。

そのような悪条件の時でも、その時、その時の状況で最善を尽くした撮影をするよう、心がけている。

(たなか・あきら＝当センター調査第１課資料係主任調査員)